御主ゼズキリシトの御パッションの事

——キリシタン訳聖福音書の一例——

海老澤有道

I

従来キリシタン訳聖書の存在については殆ど無視せられたというより，頭から存在しないものと決めてかかつており，キリシタン文献学の開拓者新村博士の如きですら「日本訳はあり得べきでない」と断定されるほどで，[1] わずかに諸キリシタン版から引用聖句を蒐集したりするに過ぎなかつた。[2] 殊にプロテスタント側にあつては主禱文などをキリシタン訳聖句の例として挙げているにすぎず，最も新しい論考である平塚益徳氏「聖書の日本語訳について」ですら，欧米における聖書の国語訳とその影響とを述べたのち「江戸時代の内外カトリック教徒が——その多方面に亙る文化的活動にもかかわらず聖書の日本語訳では，わずかに『ドチリナ・キリシタン』或はまた『ギヤ　ドペカドル』中に見られるような短い聖句の引用以外に何ら纒まつた労作を残さなかつたことは興味深い」[4] と，むしろ訳のないことに何らかの意味を見出そうとしておられるようである。

確かにキリシタン訳聖書は現存はしない。しかし少くとも福音書が 1613 年までに京都において印刷されていたことは殆ど疑う余地がない。これについては既に度々私は論じたことがあるが，なお上述のような論が行なわれているので煩を厭わずここに繰返しておこう。聖サヴィエル S. Francisco de Xavier 渡来前，最初の日本人キリシタンとなつたヤジロウによるマテウス福音書の訳を始めとして，[6] 早くから聖書の部分訳がなされていたのである。のみならず史料的にはイギリス人船長セーリス John Saris の「日本航海

記」の 1613 年 10 月 9 日の條に京都に訪れ，ポルトガル人ゼズス会士のコレジヨに「日本語で印刷された新約聖書」があることを報じ[7]，教会側文献としては後のものではあるが，デ　ムルの著に引用されたロウレイロ João Loureyroの 1791 年 6 月 26 日附デ　ムル宛書簡に東亞のゼズス会文献を若干掲げ，在清耶蘇会士イントルチェタ P. Intorcetta, S. J. の著について「1613 年迄にゼズス会によりメアコ（京都）においてフォリオ版に印刷された日本語新約聖書」を掲げているのである[8]。

これらの新約聖書は不幸にして徹底的禁教迫害のために他の多くの隠滅したゼズス会版と共に我々の眼に触れない。しかしかのフロイスの日本史でさえ漸く 1925 年以来発見されたことや，あの第二世界大戦中，あるいは終戦後にもキリシタン版や写本が思いがけなく発見されたことを見ても，なお発見の可能性はあり得よう。

事実 1940 年にシュッテ師 Schütte, S. J. によりヴァチカン図書館の写本 Reg. Lat. 459 が 1590 年来の日本ゼズス会士の手になる諸著訳の集成であることが紹介され，その中にはローマ字の福音書もあるとて若干の文例が示された。その後，村上博士の研究により日本に伝写されていたいわゆる『耶蘇教濃書』中の「ドミニカ抜書」とヴァチカン写本の「一年中のドミニカ（Dominica 主日）及び主なる祝日の福音書」と対応することが証せられた[10]。

私がここに飜字するキリシタン版『スピリツアル修行』所收の「御主ゼズキリシトの御パッションの事」も「四人のエワゼリシタの書のうちよりいだす御パッションのテキシト」とある通り，四福音書中より御受難の章句を編集したもので，すでに度々言及し，その一部を飜字して示したこともあり[11]，1873（明治6）年ブティジャン司教 Bernard T. Petitjean が『後婆迯志与』と題して石版刷で飜字出版したものもある。しかしこれまた秘密出版書であり，現今稀覯書となり充分知られていないので，ここに全文の紹介を試みたわけである。

註 1. 新村出博士「南蠻文学」(「遠西叢考」昭和 10 年, pp. 103—104)

2. 例えば村岡典嗣氏編『吉利支丹学抄』(大正15年) 巻末の聖句集.

3. アウレル師編『聖書和訳の歴史と聖書協会』(大正15年), 門脇氏編『聖書展覧会目録附聖書和訳史の概観』(昭和 14 年私版), 豊田実博士『バイブル邦訳の歴史』(昭和9年)

4. 平塚益徳氏論文「国文学解釈と鑑賞」(昭和23年6月)

5. 拙書『切支丹典籍叢考』(昭和18年) pp. 159—167
鎌田幸夫(拙)著『吉利支丹文学ノート』(昭和27年) pp. 49—55 など。

6 拙稿「ヤジロウ考」(「史学」 19巻3号, 昭和15年12月, 後,『切支丹史の研究』所收)

7. Saris, John; The First Voyage of the English to Japan. (The Toyo Bunko, Pub. Series D, Vol. III.) Tokyo 1941, p. 197

8. de Murr, Christophoro Theophilo; Johannis Koffler Cochinchinae descriptio. In epitomem redacta ab Anselmo ab Eckart. Narinbergae 1803. p. 121.

9. Schütte, Joseph: Christliche Japanische Literatur, Bilder und Druckbläter ("Archivum His. Soc. Iesu." Vol. IX Romae 1940) pp. 242—243. その後上智大学の故クラウス神父 J. Kraus, S. J. の手元にこの写真が送られ, Schütte 師は Kraus 師と私とに謎字を委せられたが, 未だに諸種の事情から果さないでいる。

10. 村上直次郎博士「ドミニカの説教について」(『キリシタン研究 第二輯』所收)

11. 拙稿「明治初年スピリツアル修行の蹂刻」(史学雑誌 48 篇7号, 昭和12年7月, 後に『切支丹典籍叢考』所收) 及び鎌田前掲書 pp. 53—55

II

さて今回重要文化財に指定せられた天下の孤本『スピリツアル修行』は今までどうしたものか極めて不遇のうちに置かれていた。1869 (明治2) 年, プティジャン司教がマニラのフランシスコ会修道院から譲り受け, 翌年末彼の日本帰任とともに 264 年前上梓の地長崎に持ち帰られ, 大浦天主堂に蔵せられた。従つてわが国内におけるその存在はキリシタン版として最も早く知

らるべき筈のものであるにかかわらず，この方面の開拓者サトウ卿 Sir E. M. Satow の眼にも触れず，ようやく大正末年に至つて東洋文庫が写真に撮り，それにもとずいて諸学者が極めて外面的な書誌的解説をなしたにすぎなかつた。その標題は次の如くである。

Spiritval Xvgvio no tameni yerabi atcumuru xuquanno Manual. Core Iesvsno Companhia ni voite amitatcuru mono nari. Svperioresto, Ordinariono yuruxiuo cŏmuri, Nagasaqi Iesvsno Companhiano Collegioni voite fanni firaqu mono nari. 1607.

スピリツアル修行のために撰び集むるシュクワンのマヌアル．これゼズスのコンパニヤにおいて編立つるものなり．スウペリヨレスと，オルヂナリヨの許しを蒙り，長崎ゼズスのコンパニヤのコレジヨにおいて版に開くものなり。1607。

本書は現今の教会用例に従つて訳せば「心霊修業書」であるが，聖ロヨラ S. Ignacio de Loyola の心霊修業（霊操）ではない。ロザイロ Rosairo 十五のメヂタサン Meditação（観想），御パッション Passion（受難）を観ずる道を教ゆる事並びに御パッションのメヂタサン，四人のエワンゼリシタ Euangelista（福音史家）の書のうちよりいだす御パッションのテキシト（Text）に次いで聖週，主日，祝日などの観想，更にレリジアン Religião（修道士）の三つのオトス Votos（誓願）やビルツウデスVirtudes（諸徳）等10種のメヂタサンについての諸書を集めたもので，主としてゼズス会学院における日本人学生のための観想書として編せられたものと察せられる。

目録の次にある 1607 年2月 15 日附日本準管区長パシヨ Vp. Francisco Pasio と日本司教セルケイラ P. M. Cerqueira, の出版許可文中に liuro chamado Manuel de diuersas Meditações と本書名を記しているように「諸種のメヂタサンのマヌアルと呼ばれる書」で，諸学者間に問題になつていた標題のシュクワン xuquan はこの限りでは「諸観」xoquan の誤植と

すべきであり，重要文化財委員が今回の指定に当つて「珠冠のマヌアル」という書名にせられたことには同意し難い。

こうしたレリヂアンのための書という本書の性格から，ローマ字国語本であるにかかわらず，他のキリシタン版のように内容が詳しく紹介されたり，全文が飜刻されたりしたことがなかつた。それは『エソホのファブラス』などの口語文学，『平家の物語』『金句集』『倭漢朗詠集』などのような日本古典，あるいは『コンテムツスムンヂ』（イミタシオ・クリスティ）『ぎやどぺかどる』のようなキリスト教古典でもなく，文学的にも言語学的にも一般の興味をひかなかつたからであろう。しかし本書の精細な発音を示すローマ字で書かれた平易な文体と豊富な語彙とは『ドチリナ　キリシタン』などより遙かに尤大であり，当代の言語研究に寄与するところはむしろ多いものと思われ，文学としてもまた特に勝れているとはいえないにしても，上に挙げた始めの三篇は私如き懐古趣味的な者には現代のそれらより遙かに文学的であり匂り高いものと考えられる。(2)

それはさておき，ここに全文を飜刻する「御パッションのテキシト」の部は四福音書から御受難の歴史的順序に従い編纂したものであつて，目録によればパアデレらの協力による聖書テキストに忠実な和訳であるが，編輯のためにどうしても無理が避けられない。共観福音書にある同一の事柄が重複して別の箇所に出てきたり，つなぎ合せるためや説明のため極めて僅かであるがテキストに若干の手が加えられ，あるいは附加されたものもある。が，それは例外で，むしろそのために文章としての続き工合はぎごちなく「さる程に」とか「されば」とかが次々に出てくる有様である。しかし，なおヴァチカン写本と共に，本書は当代キリシタン訳聖書を偲ぶ貴重な文献であることに変りはない。なお本書にはプティジァンの手になると思われるペン字の書込みが所々にある。それらは校註において示すであろう。

註　1. これは Exercitia Spiritvalia, Ignatij de Loyora. Amacvsa 1596

としてラテン文のまま天草学院から出版されている。なお最近これに倣つて本書を「スピリツアル修業」と飜字する人が多いが，本書のローマ字の示す所は業ではなく行（gviô）で「修行」とすべきである。

2. 本書については拙著『切支丹典籍證考』pp.71—108 や「日本耶蘇会版スピリツアル修行」（学鑑47巻7号，昭和18年7月）などに詳しく述べている。ついて参看せられたい。

Ⅲ

飜字校註凡例

1. 原書ポルトガル式ローマ字の発音の示すところに従う。
2. 不飜訳洋語は他のキリシタン文献の例に倣い（但し諸書によつて若干の異同があるが）飜字と原語と訳語とを附す。但し初出のものにとどめる。
3. 句読点は原書のままとし，不飜訳洋語が連続する時は一字分開ける。
4. 虫害のため判読不確実なもの以外は特に註記しない。
5. 本文にあつて校註者が加えた語は〔　〕で包む。但し聖句出典と訳語とは（　）で包んだ。十字架上の御言の中に（・）で包んだものがあるが，これは原書のままである。
6. 異訓の恐れあるものにはルビを附す。が「御」にルビを附してないものはオンと訓み，「御弟子」の場合はミデシと訓む。また「汝達」はすべてナンダチと訓む。
7. 校註は番号を附し，すべて末尾に一括する。明治6年版「後婆通志与」は明治本と略称，それとの異同は飜字に際し，意味の異なるものなど以外は一々示さない。
8. 校註の中に「参考」とあるのは他のキリシタン文献中に見える同じ聖句であるその際略称で用いた書は次の如くである。

SG.「サントスの御作業の内抜書」ローマ字本，加津佐 1591 年刊
FD.「ヒデスの導師」ローマ字本，天草 1592 年刊
GP.「ぎやどぺかどる」国字本，長崎 1599 年刊
CM.「コンテンツスムンヂ」ローマ字本，天草 1596 年刊
「日葡辞書」長崎 1603 年刊
SX.「スピリツアル修行」ローマ字本，長崎 1607 年刊

(f.1-1) 御主ゼス キリシト Jesu Christo の御パッション Passion (受難) の事：

これ四人のエワンゼリシタ Euangelista (福音史家) の記録のうちより選び集めて飜訳せしものなり.

ゼズス Jesus 御弟子達にのたまわく：汝達知れる如く，これより二日目はパスコワ Paschoa (過越祭) に当るなり．ビルゼン Virgẽ (童貞女) の子クルス Cruz (十字架) にかけらるるために渡さるべしとのたもふなり：折節サセルドウテ Sacerdote (祭司) の司，宿老，棟梁なるカイハス Caiphasが館に寄合い，ゼズスを搦めとつて害し奉らんと詮議して言いけるわ：もし萬民の中より所の騒ぎやしいだすべき：祝日を除くべしといいけるなり．さる程に ゼズス ベタニヤ Bethania にてシマン レポロゾ Simaõ Leproso(癩者シモン)が家におわします所に，ある女人アラバストロ Alabastoro の香油に価高き薬を持来つて飯台に向い給ふゼズスの御髪にかけ奉られければ，御弟子達これを見て怒りをなして曰く：この失(1)費は無益なり，高き価にこれを売りて貧人(2)に施さんものをと．ゼズスこれを知食して，汝達如何でかこの女の心を苦しむるぞ？ われに対して善き業をなせり．汝達の中に常に貧人わあるべけれども，我わ何時もいる事あるべからず，今この女われに薬をかけつる事わわれ埋まるべき徴なり．誠に汝達にゆふなり：世界において此のエワンゼリヨ Euangelio (福音) 弘まらん程の所に此の女人の業わ沙汰あるべしとのたもふなり．されば十二人の御弟子の中なるジユダス エスカリヨテ Iudas Escariote サセルドウテスの司々にゆきて，われゼズスを御辺達に(3)渡すべし；然れば何をか賜らんやと言えば，銀銭三十文と約束す．それよりジユダス ゼズスを渡し奉らん際を覓ふなり．(マナウス 26, 1—16)

去る程にアジモ Azimo(除酵祭) の初日に御弟子達ゼズスえ参られ，パスコワの日に用い給ふべき御食物(4)をば何方にて調え奉るべきぞと，問い申され

ければ，(マテウス 26, 17) ゼズス御弟子二人にのたまわく：汝達ゼルザレン Ierusalem え往かれよ；道にて水をいれたる壺(5)を持ちける者に逢わるべし；そのあとを慕い往き，落着くべき家の主に，(マルコス 14, 13—14 師匠‖わが時程近ければ，御辺のもとにて弟子とともにパスコワをすべしといわれよ．(マテウス 26, 18) その時広き座敷を見せらるべし；其処にて調えられよとのたもふなり．(マルコス 14, 15 ルカス 22, 12) 御弟子達御諚の如くパスコワの晩炊(7)を調えられければ，(マテウス 26, 19) 暮方にゼズス十二人の御弟子達共に御いでなされ，並いて食し給ふ時に，のたまわく：われパッションを受けざる前に此のパスコワの晩炊を汝達と共に服する事を願いつるなり．デウス Deus（天主）の御国成就(8)せんまでわ面々と共に服する事わあるべからず，(ルカス 22, 14—16) 誠に示すなり：汝達の中よりわれを渡すべき人一人ありとのたまえば，御弟子達大きに悲しみ，如何に君，某にて候やと，申されければ：ゼズスわれと共に鉢に手を入るる者渡すべきなり．スキリツウラ Scriptura（聖書）(9)に見えける如く：ビルゼンの子渡さるべきが，渡さん者は不便なり．さればこの人生れざるにしかじとのたもふに：ジユダス如何に師匠われにてありやと，申しければ，御辺いわるるとのたもふなり．(マテウス 26, 21—25) その時御弟子達我らが中の司わ誰にてあるべきぞと(10)語り合わるるを聞しめされてのたまわく：汝達の帝王は人間(11)の上を計らい，その中に威勢ある聖わ果報いみじきと呼ばるるものなり．さりながらそれに代りて汝達の中に高くあらん程低く下り，司なる程奴(12)の如くあるべし．飯台に着きける者と使わるる者(13)とわ何れか高きぞとゆふに，飯台に着きける者に非ずや？ われ面々の中に使わるる者(13)の如くに在りけるなり：汝達われと共にテンタサン Tentaçam（誘惑）に堪忍し届けるによつて，天の国をデウス パアデレ Deus Padre（聖父）われにまかせたもふ如く，われ亦汝達にまかするなり(14)．これわが国なる飯台の上に服せしめイスラエル Israel 十二の子孫を糺すべき台に坐すべきためなりとのたまい；シモン Simon に，如何にシモン小麦(15)を篩ふが如く，天狗(16)汝達を篩い落さんと嘆きし

かども御辺のヒイデス Fides（信仰）失せざるように賴みけるなり．善に立帰らん時，兄弟共の力を強らるべし[17]とのたもふなり．（ルカス22，24—32）

さればゼズス此の世界よりデウス　パアデレに渡り給ふべき時節近くなると知食して，此の世界に在りける御方の人々を共に思い給えば，極めに共に思召すなり．晩炊‖(f.168)過ぎてのち，ジユダス　エスカリヨテの心にゼズスを渡し奉らんと天狗企ませけるなり．さればゼズス有る程の事をデウス　パアデレよりまかせられ給い，デウスより出でさせられ，デウスに帰り給ふと知食され，その坐を立ち給い御衣をぬがせられ，白き布を帶にさせられ，盥に湯を召寄せ，御弟子達の足を洗い給い，帶にし給ふ布をもつて拭い給ふ．ペドロ Pedro に近づき給えば，如何に御主わが足を洗い給ふべきやと，中されければ：ゼズス汝われ今なす事を知らずと雖も，後にわ思い知るべしと，のたまえば：ペドロ兎角何時迄もわが足を洗い給ふべからずと中されければ：ゼズスわれ汝を洗わぬにおいては，わが方にきたるべからずとのたまえば：ペドロ如何にドミネ Domine（主よ）[18]足わ中すに及ばず，手をも，頭をも洗い給えと中されければ：ゼズス，潔き人わ足よりほかを洗ふに及ばず；汝達潔けれども，ことごとく潔からずとのたもふなり，これ御身を渡し奉るべき者を知食すによつてなり．されば御弟子達の足を洗い給いてのち，御衣を召され重ねて飯台に向わせ給いてのたま‖(f.163v)わく：われなしける業を御辺達知らるるなり：汝達われを師匠，主とわ良く名付けられたり；師匠，主なる我さえ足を洗いければ，汝達互いに洗わるべし．これわれなしける如くせらるべき鑑をあらわすなりと，（ジョアン13，1—15）のたまいてのち，パン pam を取上げ，文をとなえ，割り給い，御弟子達に賜わり，これわわが身肉なり[19]，服せられよとのたまいて：またカリス Caliz（杯）を取上げ給い，御礼あつて御弟子達に下されのたまいけるわ：各々これを飲まれよ；汝達と，数多の人の科を送るべき[20]ために流すべき新しきテスタメント Testamento（契約）のわが身の血なり．汝達われを思い出だすためにかくの如く致されよ[21]；御親の御

国にて汝達と共に新しき酒を飲むべき日迄この酒を飲むべからずとのたまいて，(マテウス26, 26—29) オラシヨ Oratio（祈禱）し給いてのち，(22) 御弟子達を召し連れられ，セドロン Cedron とゆふ河を渡り給い，御弟子達共に森の中に差入り(ジョアン18, 1)のたまいけるわ：汝達此宵わが上についてスカンダロ Scandalo（誹謗）あるべし．その故わパストル Pastor（牧者）傷を蒙らん時，羊散乱すべしとスキリツウラに見えたり．(23) 然ありと雖も甦りてのち，ガリレヤ Galilea においてまみえんとの‖(f.164) たまいければ，ペドロ申されけるわ：たとい余人わ御身の上にスカンダロありとゆふとも，我においてかつて以てスカンダロあるべからず；(マテウス26, 31—33) たとい君と共に牢舎せられ，死罪に及ぶとも，御供致すべき覚悟仕ると申されければ；(ルカス22, 33) ゼズス誠に御辺にゆふなり：此宵鶏鳴かぬ前に，三度我を陳ぜらるべしとのたまえば：ペドロ重ねて師匠共に死するとも，陳ずる事あるべからずと申されければ；残りの御弟子達も同じく申されけるなり．(マテウス26, 34—35)

されば程なくゼツセマニ Gethsemani とゆふ森に着き給えば，御弟子達に仰せけるわ：(26) われオラシヨせん間，此の所にしかといれられよとのたまい，ペドロ，ジヤコウベ Iacobe，ジョアン Ioam を御供にて森の奥え入り給えば，畏れ悲しき御心を受け始め給いてのたまいけるわ：われ死する程悲しきなり；(27) 汝達此処に番していられよとて，(マテウス14, 32—34) 三人のいらるる所より少しゆき伸び給い，(28) 膝まづき給い申させ給ふわ，如何にパアデレ何事も叶い給えば，我より此のカリスをのがし給え；(29) 然れどもわがオンタアデ Vontade（望）をそだて給ふべからず；ただ思召すままにあらせ給えとのたまいて，(30) 御弟子達のいら|(f.164v) れける所え帰り給い，眠られけるを御覽あつて，ペドロにのたまいけるわ：如何にシモン眠られけるか？ ただ一時の番をさえ我と共に届くる事叶われざるや？ テンタサン(31)に入るまじきために寢ずしてオラシヨせらるべし：スピリツ Spiritu（精神）(32) わ勸むと雖も，此の色身(33)わ弱きなりとのたまいて，重ねて元の所に至り給い，如何にパアデレ此のカリス

を飲まずして叶わぬにおいてわ，御オンタアデを遂げ(35)給えと申させ給い，また御弟子達に帰り給ふに，(マテウス26, 38—42)悲しみの余りに両眼重くなりてねむられければ，ゼズス汝達何とて眠られけるぞ？　立ちあがりて番せられよとのたまい(ルカス22, 45—46)オラショ申させ給えば，アンジョ Anjo（天使）(36)天降り御力を添え申さるるなり．ゼズス深き御悲みを以て暫くオラショし給えば，血の御汗を雫の如くに土まで流し給ふなり．(ルカス22, 43—44)そののちオラショの所を立たせ給い，御弟子達の傍に御いであつてのたまいけるわ：今わ汝達やすみ臥すべし；ビルゼンの子悪人の手に渡るべき時節きたるなり；立上りて我と共に向わ(37)るべしとのたもふ御言葉の下より，十二人の御弟子達の中ジユダス エスカリヨテ サセルドウテの‖(f.106)棟梁，スキリイバ Scriba（律法学者），宿老より遣わしける数多の兵士の案内者として火をともし，(38)矛兵杖を帯してきたるなり．謀叛人ジユダスかねての約束にわ，われ御顔を吸い奉るべき人体を搦め取つて油断なく召し(39)龍められよといい棄て，御傍近く参りければ：(マルコス14, 41—45)ゼズス御身の上にある程の事を知食され，ジユデヨ Iudeo（ユダヤ人）らきたるべき道にいで向わせ給い，誰を尋ねらるるぞとのたまえば，ナザレツ Nazareth のゼズスと答ふるに：われなりとのたもふ折節，ジユダス以下の者共御言葉を承り，後にしざりのつけに(40)転びけるなり．重ねて誰を尋ねらるるぞとのたまえばナザレツのゼズスと答ふ．ゼズス我なりと既に現わしければ，我を尋ねらるるにおいてわ，我と共にきたれる者共を帰されよとのたもふ．これ我に賜わる者を一人も失わざるとのスキリツウラのポロヘイシヤ Prophecia（預言）を遂げさせられんがためなり．(ジョアン18, 4—9)

(41)

されば(42)ジユダス近づき奉つて，アベ　ラビ Aue Rabi（師よ）と申上げ，御顔を吸い奉り，如何に親しき仲(43)何の故にかきたられけるぞ？　吸ふことを合図にしてビルゼンの子を渡されけるやと，(44)のたもふ｜(f.106v)折節，強者共取囲み，荒けなく搦め奉れば，(マテウス26, 49—50)，ペドロ剣を抜きポンチヒセ Pontifice

（大祭司）の郎等マルコ Malco とゆふ者の右の耳を斬り放さるれば，ゼズス，ペドロ剣を鞘に納めよ：御親より我に与え給ふカリスをわれ飲まん事を汝否と思うや？（ジョアン18，10—11）剣にて殺さば，剣にて殺さるべし．われ御親を頼み申さば，十二のレジョンLegion（連隊）(45)よりもなお数々のアンジョを賜わるべきことを知られざるや？ その儀ならば，スキリツウラの旨(46)をば何としてか成就すべきぞ？ かるが故に此の事なくて叶ふべからずとのたまいて，（マテウス26，52—54）かの耳に御手をかけ，もとの如くにつぎ給いて（ルカス22，51）ジユデヨらに仰せけるわ；われ毎日テンポロ Templo（会堂）において(47)教えし時わ捕めずして，何の故にか兵具を帯し盗人のように召捕らるるぞ？（マテウス26，55 マルコス14，48-49）さりながら闇盛んなる汝達の時今なり；（ルカス22，53）かくの如くある事皆スキリツウラを遂げんがためなりとのたもふなり．（マテウス26，56 マルコス14，49）

去る程にジユデヨらゼズスを捕め奉れば，御弟子達散りぢりにならるるものなり．これに白き単衣打掛けたる若き人一人ゼズスの御跡を慕い参られけるに，兵も‖(p.166)の共取りつきければ，衣をぬぎ棄て裸になりて逃げられけるなり．（マルコス14，50—51）されば ジユデヨらサセルドウテの司カイハス Caiphas の舅アナス Anas の許えゼズスを曳き奉れば，（ジョアン18，13）ペドロ共に一人の御弟子遥かに隔たりゼズスを見送り参られけるなり．かの一人の御弟子わアナスの知る人にてゼズスと共に奥に入られ，門の役者に(48)断り，ペドロをも内え入れられたるなり．（ジョアン18，15—16）その時アナス出で会い，御教えと，御弟子の事を問い申されば，ゼズス，われ世上に現われて知られ，テンポロ，シナゴガ Sinagoga（神殿）(49)において諸々のジユデヨ集まる所にて常に教え，隠して一言も□言わざりければ，(50)我に問わるる迄もなし；かの人々に尋ねられよ：言いける事を聞かれし人々答えられんとのたもふ所を，アナスの郎等，ポンチヒセに対して(51)左様に返答しけるかとて，御顔を打ち奉れば，ゼズス我いいける事悪しきならば，その理をいわれよ：善きならば，何と

て我を打たれけるぞと，仰せければ，搦め申しながら棟梁なるカイハスの許え曳き奉るなり．（ジョアン18，19—24）

さればカイハスの館にわサセルドウテスの司，スキリイバ(52)，宿老以下相集つて（f.166v）ゼズスを害し申すに伏せ奉(53)るべき讒言を企むなり（マテウス26，57 マルコス14，55?）ペドロわゼズスの御跡を慕い奉り，カイハスの許に雑人原の焚火していける所に，立寄りあたらるるなり．（マルコス14，54）　サセルドウテスの棟梁或いわスキリイバ，或いわ所の宿老以下ゼズスを死罪に落着致すべきために虚説を企み求むれども，無かりつる所に，ある人二人進みいでて申懸くる虚説にわ：われデウスのテンポロを崩し，三日過ぎて造り建てんと申されけるを我ら承る（マテウス26，59—61）といいけれども，此の二人の証拠も正しからねば：カイハス立上り，如何に御辺に対して申懸けらるる事の返答少しもなきやと申しけれども，兎角の御応えもし給わず；重ねてサセルドウテスの司，御身わデウス ヒイリヨ Deus Filho（聖子）にてまします〔や〕と，申しければ，ゼズス我をデウス ヒイリヨとわ御辺言わるるなり；その分なり；ビルゼンの子デウス パアデレの御右に住し，雲に乗りていでん事を汝達見らるべしとのたまえば，その時カイハスこれわデウスを悪口するなりとて，わが衣裳を引破り，かほどの悪口を聞く上わ，別の証拠もいるべからず：只今の悪（f.167）口を各々聞かれたり；しかれば如何にと申されければ，尤も殺さずして叶わぬ人なりと，死罪に落着致しけるなり．（マルコス，14，59—64）　さればジュデヨらあなどり奉るために御顔に唾をはきかけ(54)，御両眼を結いふさぎ，御うなぜを打ち奉り(55)，只今打ちける者の名を言い給えと申し，（ルカス22，63—64）　雑人原に至る迄も御顔を打ち奉るなり．（マルコス14，65後半）　さればペドロ火にあたつていられけるに，下女一人きたつて御辺わナザレツのゼズス同心の人なりといいければ，ペドロさらに見ず，知らざる人なりとて，庭えいでらるるに，別の下女きたつてペドロに指をさし，如何に人々これこそゼズス同心の人よといいければ，かの人を知らずと誓いを以て陳じ(57)申さるるなり．（マテウス26，69—72）　ややあつて耳を放

されけるポンチヒセの郎等の一族(58)きたつて，(ジョアン 18, 26) 汝わゼズス同心の者なり：その故わ汝が口柄(59)即ちその身を現わすなりといいければペドロ誓いを以てゼズスといえる人をば見知り申さぬと陳ぜらるる折節，鶏既に鳴きけるに，ゼズス ペドロを見顧み給えば鶏なかざる以前に三度われを陳ずべしと，のたまいつる事を思い合わせて，門外にいでてか｜なしみの涙を流されけるなり．(マテウス26, 73後半—75)

さる程にその夜の暁方にサセルドウテスの棟梁，スキリイバ(61)，所の宿老以下寄合い，詮議評定とりどりにゼズスを死罪に落着して，(マテウス 27, 1) 曳きいだし奉り，御辺キリシトにてましまさば，我らに顯し給えと申しければ，ゼズスわれ顯すとゆふとも，汝達誠に受けらるべからず；問わるるとも答ふべからず，赦さるる事もあるべからず．近き程(62)ビルゼンの子デウス パアデレの御右に至つてまみゆべしとのたまえば，ジュデヨらさてわデウス ヒイリヨにてましますやと申しければ：われをデウス ヒイリヨとわ御辺いわるるなりとのたまえば，ジュデヨら申しけるわ：その身を口よりいわれける上わ，何ぞ別の証拠を借るべきぞとて，搦め申しながらピラトス Pilatos の許え曳き率るなり．(ルカス22, 66—71及23, 1)

さる程にジュダスわゼズス死罪に定まり給ふを見て，後悔の心を起し，三十文の銀銭を持ち，サセルドウテスの司，宿老共の並いる所に往きて申しけるわ；科なき人の御血を渡すを以て重き罪を致せるといいければ，サセルドウテス，我ら少しも苦しからず，汝知るべしと応えければ；かの銀銭をテンポロに投入れ，立帰り‖首をくくり(f.168)，片腹破れて死しけるなり．さる程にサセルドウテスの司詮議しけるわ：この銀銭わ血の代りなれば，テンポロの箱に入るべき事本意に非ずとて，土鍋作りの屋敷を買取り，他国よりきたる無縁の人の三昧(63)と定め，アセルデマ Aceldema と名付けたり；これ血の屋敷とゆふ心なり．ここを以てゼレミヤス ポロヘイタ Ieremias Propheta（予言者エレミヤ）御主我に下知し給ふ如く，イスラエルの子よりねぎりたる三十

銭を取つて，土鍋作りの屋敷の代りに渡しけるとのポロヘイシヤ(64)を遂げ給ふなり．(マテウス27, 3—10)

さる程にジユデヨらピラトスの許えゼズスを曳き渡し，その身わパスコワのコルデイロ Coldeiro(小羊)を服する(65)けがれを受けまじきとて，奥え入らざりければ，ピラトスいで給い，ゼズスの御上に何たる題目を訴え申さるるぞと，問われければ，ジユデヨら罪科人に非ずんば，如何でかか様に渡し申すべきと応えけるなり．ピラトス面々の許え引具して，律法の如く，糺明あれと申されければ，サセルドウテス，人を殺す事我らにあた□(66)ざる儀なりと申しけるなり．これ即ちゼズスかねてのたまい置かれたる死し給ふべき道を遂げさせられんためなり．(ジヨアン18, 28—32) その時ジユデヨ讒奏(67)(f. 168v)｜申しけるわ：かの人我らが一門の輩をたばからんとて，セザル Cesar（皇帝）え備え申す貢物(68)をいましめ押え，わが身をキリシトと名乗られけるを聞きはんべると申しければ；(ルカス23, 2) ピラトス ゼズスに御辺わジユデヨの帝王かと尋ね申されければ：ゼズスその糺明わ他人の訴えか，私の不審かと，のたまえば：ピラトス我ジユデヨに非ず，御辺の人数ポンチヒセスより渡しければ，何事をし給ふぞと申しければ，ゼズスわが国は此の世界よりいでず：その故わ此の世界よりいづる国なるにおいてわ，ジユデヨに渡すまじきために，我に仕えける者ども支ゆべし．さりながらわが国わ此の世界よりいでずとのたまえば：ピラトスさあれば帝王にてましますやと申されければ，ゼズス我を帝王とわ御辺申さるるなり；この世界に生れきたる事わ真理を現わす証拠に立つべきためなり：真理を用ゆる輩わわが言葉を聞くなりと答え給ふ．ピラトス真理とは何事ぞと申し乗て，重ねてジユデヨにいであい，かの人に少しも科の題目なしと申されければ；(ジヨアン18, 33後半—38) ジユデヨら怒れる声を以て，ガリレヤよりジユデヤ Iudea までの萬民を教え乱らすと申しければ：ピ‖(f. 169)ラトス ガリレヤと聞かるるより，あり合いける者共にゼズスわガリレヤの人かと問い，ガリレヤわエロデス Herodes の甚いなればとて，折節エ

ロデス　ゼルザレン Hierusalem に在洛なるに，ゼズスを遣わし奉るなり．その時エロデス　ゼズスを見奉りて喜ばれけるなり：その故わ現わし給ふ御事を伝え聞かれ，常々まみえ度く思われければ，今わが前にてし給ふべき御奇特(69)を見んと思われけるによつてなり．さればエロデス様々の事を尋ね申されけれども，少しも御返答なかりつるなり．さる程にサセルドウテスの司，スキリイバ精をいだして訴えければ；エロデスを初めとして以下の人々蔑げ賤しめ奉り，果には侮り申すために白き衣裳を着せ参らせ，またピラトスえ引返し奉るなり．

さる程にピラトス，サセルドウテスの司，スキリイバ，そのほか所の宿老を召寄せ披露せられけるわ；世間を教え乱らす人の如くわが前に引具し訴えらるるについて御辺達の前にてその科を糺明すと雖も，さらに誅すべき道理なし；(70)またエロデスも同前なり：その故わわが許に返され（f.100v）けるなり．詮ずる所わ(71)苛責をなして赦し申すべしとありければ，（ルカス23，5—16），サセルドウテス件の如く虚説を以て讒奏すれども，ゼズス兎角の御返事なし．その時ピラトス　ジュデヨらより申しかくる事どもを聞き給わぬやと，申されけ〔れ〕ども，それにも御返事し給わざれば，ピラトス大きに驚き申されけるなり．(72)（マルコス27，12—14／マウテス15，3—5）されば昔よりの法度に，パスコワの日に当つて萬民の望みにまかせ牢者一人守護人より赦さるる事あり；折節盗みをし，人を殺し，隠れなきバラバス Barrabas とゆふ牢者ありけるなり．ピラトス　ジュデヨらゼズスを憎みたてまつて(73)讒奏すると知られ，サセルドウテスに問われけるわ：かのパスコワの日に当つてキリシトと申すゼズスと，バラバスとわ，何れをか赦すべきぞといつて，トリブナル Tribunal（法廷）(74)に坐していられけるに，殿中より使いを立てられ，かの善人の上を沙汰し給ふべからず：その故わ過ぎし夜その善人につき様々の難儀をこらえつる事ありと申されけるなり．（マウテス27，15—19）その時ピラトス重ねてジュデヨに何れをか許すべきぞと申されければ：サセルドウテスの司 [ ](75) んにゼズスよりもバラバスを赦

すように申し勧めて，‖声々に(f.170)バラバスを赦し給えといいけれども，(マテウス27，20—21) 尙々ピラトス　ゼズスを赦し奉らんとて，重ねてサセルドウテスにジユデヨの帝王を何と重い申すべきやと，問われければ，クルスに架け給えと申しけるなり．ピラトス，何たる悪事をせられけるぞと，問われけるに，ジユデヨら愈々大音声を以てクルスに架け給えと申しければ：(76) ピラトス　この体を見られ，か様に申し乱らす上わ，言い甲斐なしと思われ，われ此のジユスト Iusto（義人）の血にけがれず，各々知らるべしとて，汚れぬ徴として水を召寄せ，諸人の前にて手を洗われければ：ジユデヨらその血わ我らを先として子孫の上にかかるべしといいけるなり．(77) その時ピラトス　ジユデヨらの望みにまかせバラバスを赦し，ゼズスを打擲し奉るなり．

そののち下人奥に曳入れ申し，赤き衣裳を召させ，ジユンコ Iunco とゆふ茨の輪を作り，(78) 御髪に打込み，御右の手に竹を参らせ，侮り申すために有合いける人を召し集め，御前に畏まつて，アベ．レキス　ジユデヨルン Ave Rex Iudeorum（ユダヤ人の王よ安かれ）と申上げ，(80) 御顔を打ち，唾を吐きかけ，御手に持たせ奉｜る竹を取つて(f.170v)御髪を打ち奉るなり；(81)（マテウス27，22—30）重ねてピラトス内より外え出で向い，ジユデヨらに申されけるわ：ゼズスの御上に死し給ふべき道理なき事を知らしめんがために唯今此処え曳出し奉るとて，赤き衣裳と，茨の輪を召させながら萬民の前に曳出し，此の人を見られよと申されければ；(82) ポンチヒセを先として雜人原に至るまで御有様を見奉り，尙々大音を響かせ，クルスに架けられよと声々におめき叫びけるなり．その時われゼズスを害し奉るべき道理なし；面々受取つてクルスにかけられよと申されければ：ジユデヨらその身デウス　ヒイリヨなりといわるる上わ，我らが法度に害する事專らなりと申しければ；ピラトスこの事を聞かれ，畏れをなし奉り，重ねて奥に入り，ゼズスに御辺わ何処よ□□(83)たり給ふぞと，問い奉られけれども，兎角の御返事し給わねば，ピラトス申されけるわ：クルスにかけ奉る事も，赦し申す事も某が計いなるに，何とて御返事なきぞ

と申されければ：ゼズス上より赦されずんば，われを量ろう事叶わるべからず。(84) ‖(f.171) かるが故に我を渡しける者の科わなお深しとのたもふなり．その時ピラトスなおゼズスを赦し申すべき道を求められけれども，ジユデヨら大音声にてゼズスを赦し給ふにおいてわ，セザルの味方にてあるべからず．その故わわが身を帝王と現わす人わ皆セザルの朝敵なりと申しければ，(85) ピラトス此の訴えを聞かれ，ゼズスを曳き出し奉り，その身わ守護の役としてリトウストロス Lithôstros（審判席） とゆふ所に坐せられけるなり：これをエブライカ Hebraica（ヘブライ語）の言葉にわガツバタ Gabbatha とゆふなり：折節パスコワのセスタ　ヘリヤ Sexta Feria（第6日即金曜日）のセスタ時前なるに，ジユデヨらに面々の帝王わこれなりと申されければ：ジユデヨら怒れる声を以てそこ退き給え，そこ退け給え，クルスに架けられよといいければ；御辺達の(87)帝王をクルスにかくべきやと，申されけるに，ジユデヨら我らセザルより他に帝王わ持たず(88)といいけるなり．

その時ピラトス　ゼズスをクルスにかけ奉るべきに落着して，（ジョアン19，4—16前半） 即ち赤き衣裳をぬがせ申し，始めの御衣を着せ参らせ，クルスをかたげさせ奉り，（マテウス27，31 マルコス15，20） 同罪に行のふため‖(f.171v) 盗人に相添えゼルザレンより外に曳出し奉るに（ルカス23，32） シモン　シレネヨ Simon Cireneo とゆふ人に往き逢い，彼を傭い，クルスをかたげ給ふ御合力に添えけるなり．さる程に御跡より参る群集(89)に相混わり数多の女人泣き悲しみければ，ゼズス顧み給い，如何にゼルザレンの娘わが上を悲しむべからず，その身を先として子孫の上を嘆くべし：その故わ子を産まぬ女人と，育てぬ女を果報と呼び，大山に向つて如何に山わが上に覆いかかれとゆふべき時刻到來すべし：それを如何にとゆふに，青みたる木さえ斯様にあれば，枯木わ如何にとのたもふなり．(90)（ルカス23，26—31）

さる程にゼズスにクルスをかたげさせ奉り，カルワリヨ Caluario の山に曳き登せ申し，苦きものに酢をあわせて御口に入れ奉るを味わい給いて飲み

入れ給わぬなり．(マテウス27,33—34) その時兵士ども打囲み奉り，ゼズスを裸になし，クルスにかけ申すなり．つぎに盗人二人クルスにかけ，左右に立て並べ，ゼズスの御クルスをその真中に立てけるなり．(ジョアン19,18)、されば罪人の如くに思われ，罪人の中に加えられ給ふと，イザイヤス Isaias[91] の書かれたる‖(f.172)ボロヘイシヤスを遂げ給ふなり．(マルコス15,28) その時ピラトス ナザレツのゼズス，ジユデヨの帝王なりと，エブライカ，ゲレシヤ Greca（ギリシヤ語），ラチナ Latina（ラテン語）此の三様の字を以て板に書きつけ，ゼズスの御クルスの上に打着けらるるなり．されば諸々のサセルドウテス ピラトスの許に往きて帝王と書き給ふべからず，その身ジユデヨの帝王と言われ、けると書き給えと申しければ：御衣裳を取寄せ，四つに分け，面々一つ宛を配分し，縫目なき一つの御衣の上に申合いけるわ：これをば分けて□[92]べからず．ただ符にまかせよとて，籤取りに致しけるなり．これを以てわが衣裳を分けて取り，わが衣裳に籤取りに致しけるとのボロヘイシヤ[93]を遂げ給ふなり．(ジョアン19 19—24)

その時ゼズス如何に御親，彼らは今なす事を辨えざれば，赦し給えとのたもふなり．(ルカス23,34) さる程に往來の者共侮り奉り，頭を振り，悪口を中しけるわ：テンポロを崩し；三日過ぎて建てんとありける上わ，我とその身を扶けられよ：デウス ヒイリヨならば，クルスより降りられよかしと申[94]|(f.172v)すなり．サセルドウテス，スキリイバ，宿老共クルスのもとに立ち並び，悪口中しけるわ：他人を扶け，わが身を扶けられざるや？ デウス ヒイリヨと名告られける上わ只今クルスより降りられよ；然れば我らもイスラエルの帝王と誠に受くべしと申すなり．(マテウス27,39—42)

御左の盗人申しけるわ：キリシトにてましまさば，御身を先として，我らをも扶け給えと悪口申しければ；御右の盗人傍輩[95]をとがめけるわ：死するに定まりたる身を持ちながら何とてデウスを畏れ申さぬぞ？ 我らわなしける科によつて，今この制罰[96]を受くるなり．さりながらこの君わ御科少しもまし

まさずといい捨て，ゼズスえ申上げけるわ：如何に君御国え到り給わん時，我を思召しいだし給えと申しければ；ゼズス誠にゆふなり：汝今日我と共にパライゾ Paraiso（天国）え到るべしとの(97)たもふなり，（ルカス23, 39—43）

さる程にクルスのもとに御母(98)サンタ　マリヤ Sancta Maria 御兄弟のマリヤ　ケレヨヘ Maria Cleofe, マリヤ　マダレイナ Maria Magdalena 立並びてい給えば，ゼズス御母と，御大切に(99)思召す御弟子を御覽あつて，サンタ　マリヤに，（如何に女人御身の子を見られよと）‖(f.178) のたまい，御弟子に（汝の母わこれなりと）のたまえば，(100)これより御弟子サンタ　マリヤを御母とあがめ給ふなり，（ジョアン19, 25—27）然るにセスタ時よりノナ Nona（9，現在の3時）の頃まで日燐光を隠しければ，世界常闇となるなり：ノナに移る時分ゼズス御声をあげ給い（如何にわがデウス，如何にわがデウス，何とて我を放し給ふぞと）宣い，(101)（マテウス27, 45—46）ゼズスある程の事を達し給ふと思召してスキリツウラを遂げさせられん為に喉かわくとのたまえば：ジュデヨら酢に合せたる苦きものを参らせければ，味わい給い，成就せりと宣いて，（ジョアン19.28—30前半）高き御声にて（如何にパアデレわがスピリツを御手に渡し奉ると）(102)宣い（ルカス23, 46前半）御髪を傾け，御アニマ Anima（靈魂）を渡し給ふなり，（ジョアン19, 30後半）

その折節テンポロに掛りたる戸帳二つに裂け，大地大きに震動して，石は已れと砕け，数多の善人生きかえり，ゼズス甦り給いて後，棺槨を出でてゼルザレンにて数人にまみえられけるなり．さればセンツリヨ Centurio（百卒長）ともに番していける者ども天地に出で來たる徴を見て大きに恐れけるなり．中にもセンツリヨわこれ誠にデウス　ヒイリヨにてましますと申し尊みたて‖(f.178v) まつるなり．（マテウス27, 51—54）その場にあり合いける者ども胸を叩きて帰るなり．（ルカス23, 48後半）

さる程にガリレヤより仕え奉る為に参られける女人達の中にマリヤ　マダレイナ，マリヤ　ジヤコウベ，ジョゼイフ Ioseph の御母サロメSalome も

ましますなり。(103) (マテウス27,55—56 / マルコス15,40—41) 次の日わジユデヨの用ゆるパスコワの日なれば，サベト Sabbado(土曜日）まで死骸をクルスに置くまじきためピラトスのもとえ往きて申しけるわ：兵士を遣わし，クルスにかかりける者共の脚を流せ給え(104)と頼みければ：即ち武士を差遣わし，盗人二人の脛を流せ，ゼズスを見奉るに，早や御色体離れ給えば，(105) その儀に及ばざるなり．ここに或る武士槍を以てゼズスの御右の脇を突き奉れば，御血と，水とを流し給ふ．これを見奉る人証拠に立つ：この証拠真実なり，いいつ□(106)真実を知るによつて，のちの人のヒイデスの為に録すなり．これ皆スキリツウラを遂げ給わんがために，(107) ありつるものなり．(ジョアン19,31—36)

さる程にアリマチヤ Arimathia にジョゼイフとて善者あり：これジユストなるが故にジユデヨの謀叛に組せられず，天の国を願いて‖(f.176) 頼母敷く思う人なり．(ルカス23,50—51) ゼズスの御弟子なれども，ジユデヨに恐れて包みいられけるが，(103) (ジョアン19,38) その時わ強き心を以て；ピラトスのもとえ往き，ゼズスの御死骸を請い受け申されければ：ピラトス早や死し給ふかと驚かれ，センツリヨを召寄せ尋ね，死し給ふ事を聞かれ，御死骸をジョゼイフに遣わすなり．その時ジョゼイフ布を持たせクルスの御許え参られければ，(マルコス15,34—46前半) 夜過ぎてゼズスえ参られつるニコデムス Nicodemus とゆふ人も香ばしき薬を合せたるミイラ Mirrha（沒薬）五斤程持たせきたつて，アリマチヤのジョゼイフ共に御死骸をクルスより降し奉り，ジユデヨの習いの如く，薬を塗り，白き布にて巻き奉り，その近辺の森のうちにいまだ死骸を入れざる新しき石棺ありしに納め奉つて，(109) 各々帰らるるなり．(ジョアン19,39—42) されば御跡より参られけるマリヤ マグ.レイナ，別のマリヤもその所に居給い，納め奉り様を見られけるなり：次の日サセルドウテスの司，同じくハリセウ Phariseu（パリサイ人）(110) ピラトスの許え往き申しけるわ：如何に主かの人存生の時三日過ぎて生き返らんといわれたるなり．しかれば弟子共その死骸を盗み取つて生き‖(f.176v) 返られしと諸人に披露すべし：しかれば，初めの迷

いよりも後の迷いわなお深かるべし．三日迄その棺に警護の武士を置き給えと申しければ：ピラトス兎も角も面々の望みにまかせ番を添えられよとありしかば，ジュデヨら御棺の上に印判をすえ，数多の番衆を置きけるなり．
(マテウス27，61—66)

ヒニス　Finis（終）

校　註

1. Xittçui. SGの「言葉の和らげ」によると vxinai votosu とあり，失墜が当る．が，意味は Gasto 即ち失費，消費である．明治本は失墜を採る．
2. finin は非人があてられるが，「日葡辞書」によると「貧しい人」の訳が附され，fin-nin と同義．
3. 明治本は「司」「御辺」と単数で示す．
4. 明治本は「御祝物」しかも「いわひもの」とルビを附すが，もちろん誤．
5. 明治本は「坪」
6. 参考；"如何にも大きに広き坐敷を調えよ，汝が許えわが弟子共を伴いててパスコワの振舞をすべし"（CM.IV, 12）
7. 明治本，「晩煩」と書誤る．後の箇所は「晩炊」
8. 明治本「御国に」と誤る．
9. 同，「金言」と訳す．
10. 同，「有へとと」と誤る．
11. 同，「人間之」と改む．
12. Yatçuco ヤツコでヤッコではない．
13. 明治本，「遣わるゝ」は誤．
14. 参考；"汝等吾れと共に難儀の時屈かれたり．共れに依て天の国をデウスパアデレ吾れに賜ふ如く，我れ又汝等に任せ置く"（Ma.III.4）
15. 明治本．「シモン」を欠く．
16. 悪鬼．サタン．教会特殊語は原語主義が採られていたが，これだけはサタンの訳語として頻りに用いられた．当時の「天狗」の概念は現在と勿論異るが，明治本も亦これを用いたから，読者に誤解を与えたことであろう．
17. 「強り」という語が，強る，強つた，又は強らし，強らいた，などと活用されている．明治本が「強かるべし」としたのは誤．
18. 明治本，「如何に君」とする．
19. 同，「肉身」とするが，当代語は「日葡辞書」を見ても「身のししむら」とあり，

「身肉」である.

20. 科送り，罪を贖うこと．広義には俘虜告解の意にも用いられる．

21. 参考; "セスキリシト，クルスニ掛リ給ハン前ノ夜，十二人ノ御弟子共ニ晩炊シ給フ内ニパンヲ御手ニ取，是我色身也．食セラルベシト宣フ．同葡萄酒ヲ是我血飲給へ，以後是ヲ行ハルベキ度毎ニ我ヲ思出サルベシトノタマフ"（「顯偽録」日本古典全集本 p.23). 其他 "此は汝達が為に敵の手に渡さるべき我が色身なり" (SG. p. 31); "是をせんたびごとに我を思い出す為にせよ" (GP. II. 1, 5); "これをとり行わん時わ，必ずわが事を思い出だす為に志すべし" (CM. IV序)

22. この句，聖書にないが，ジョアン 17 章のゼズスのオラショをさして挿入したものであろう．

23. ザカリヤス13章 7 節，明治本，「金言」を用いること前の通り．

24. 明治本，「御供致すへく覚悟仕候」とある．

25. 述べるの語義ではなく，当時は「否認する」の義．

26. 明治本「仰されける」

27. 参考; "わがアニマ死する迄悲しきなり" (SX, ff. 27. 28) (FD, III, 6); "わがアニマ死する迄苦しきなり" (SX, f, 90v)

28. 参考; "御弟子達の傍をつぶてだけ程遠去かり給いて" (SX, f. 27)

29. 明治本「除き給へ」

30. 原本 sodate を消しペンで tachi と書き入れがある．プテイジアン式ローマ字でタシと訓むが恐らく「達し」の誤記であろう．但し明治本は「我儘を出だし」とある．参考; "如何にデウスパアデレ叶う義に於てわ，この難儀をのがし給え; さりながらわが望を遂げ給わず，思召すままにはからい給え" (SX, f. 27)

31. 達する，全うするの意．

32. 明治本，「誘惑」とあり，明治初期教書類にこの形が広く用いられている．参考; "天狗のテンタサンをのがれん為に，信心を以てオラショすべし" (FD, II, 7)

33. 明治本，「盛魂」と訳す．

34. 肉体の義，仏教語．

35. 明治本，「思し召儘を」と訳す．

36. 同，「御天神」と複数で示す．

37. 同，「御出ありと」と誤る．

38. 同，「迎わる」とあるが，ここは「向い行く」の義．

39. ジョアン 18 章 3 節により此の句を挿入したものであろう．

40. 仰向けにの意．

41. 明治本，「金言に未来之事を遂げさせられん為也」とある．サルモス(詩篇) 108 篇 8 節．

42.同,「君に御礼をと申上」.

43.同,「親敬哉」と誤る.

44.ルカス 22 章 48 節が挿入されている.

45.明治本,「組」と訳す,

46.同,「御金言」,以下この訳語同じ.

47.同,「御堂」と訳す. キリシタンでは一般に,ユダヤ教の会堂にテンポロを用いている.

48.同,「門役の者」とあり.

49.同,単に「御堂」として,テンポロとシナゴガを一つにしている.

50.「一言も物言わざりければ」であろう.明治本は「一言もかくさず理(きと)しければ」と適当に片附けてしまつている.

51.明治本「ポンチヒ ぜずすに対して」と誤る.

52.同,「カイワス司宿老以下」と略している.

53.罪に服せしむの意.

53.tcufaqi 卽ちツハキでツバキではない.「易林本節用集」などはツバキとなつているが,1605 年の長崎版「サカラメンタ提要附録」中には tçuva 卽ちツワという用例もある.

54.vnaje とあるが vnaji の誤植か.

56.原書は bechi を多く使用するが,此処は betçu とある.

57.校註 25 参照.明治本「陳事」と誤る.

58.明治本,「ポンチヒセス之一族」と誤る.

59.方言,語振りの意.明治本は「なんじ口から其身を」と「自ら」の意に誤つている.

60.明治本,単に「頒み給えば」.

61.明治本,この語を脱す.

62.同,「近き程赦さるゝ事も有べからず童身之子天主御父」云々とあり.

63.sammai.「日葡辞書」に墓所と出ており,菩提をとむろう所の意で三味堂が転じて単に三味となつたものであろう.

64.明治本,「未来之事」と訳す.出典はゼレミヤス 11 章 13 節.なお原書この頁の下に miraiki 卽ち「未来記」とローマ字書入れがある.

65.食するの意.

66.虫害あり,「当らざる」か「能わざる」か稍不明,明治本は後者を採る.

67.明治本「諌訴」とあるが,原文は zãsô であるから「諌奏」とすべきである.

68.mitçuqimono ミツキモノでミツギモノではない.なお明治本はセザルを「天子」と訳している.

69.奇蹟のこと.

70. 参考; "この人体を害することは非儀なり" (FD.IV, 1.11); "この人を殺すべきいはれを分別せず" (「契利斯督記」, 続々群書類従12. p.35)

71. 明治本, 「センズル所ハ」とし, 「センズル」に「下人の事」と傍註しているが勿論誤り.

72. 参考; "権門の前に様々に訴えられ給えども, 御返事少しもなければ, ピラトスこれを見て大きに驚き申上げ奉るは, 何とてわれに返事し給わぬぞ" (FD.III.14)

73. tatematte タテマッテ. 後にもこの用例がある.

74. 明治本, 「捌場所」と訳す. ペン字書入れには choughi 即ち「床几」となつている.

75. 同, 「諸人」をあてる, 恐らくそうであろう.

76. 参考; "ジュデヨら大音を天に響かしてただクルスにかけ給え, かけ給え" (FD.IV.1)

77. yuicai. ペン字で yiicai と訂正書入れがあるが; 原のままが良い. 明治本は「言申更」

78. 参考; "この人体の血は, 我らと我らが子孫の上にかゝるべしと云いしものなり" (FD, IV.1.11)

79. 明治本「ジュンコとゆふ」を欠く.

80. 同, 「ジュデイ等之帝王ハ御礼をなし奉る」と訳す.

81. 参考; "それより後, 強者共赤き色の古き衣裳を召させ奉り, 御頭にわ茨の冠を押込み, 御手にわ竹を持たせ奉り, 御前に膝まずき, ジュデヨの帝王に御礼申上るとして, 御手なる竹を取りて御髪を打ち, 様々に侮り奉り" (SX, f.37)

82. 参考; "ゼズスを万民の前に曳出だし奉り, エキセオモと申され" (SX.f.37); "御主を万民の前に曳出だし奉り, エキセオモ; 此の人を見られよ" (SX.f.39); "此の人を見よ" (SX.f.93v)

83. 明治本が「何国より来り給ふぞ」としている通りである.

84. 参考; "何とて我に返事をし給わぬぞ, 御生死わ我が手にありと知り給わずや" と…… "宣わく, 上よりその御放免なきに於てわ, わが上を計ろうこと叶うべからず" (FD, III.14.3)

85. 参考; "シュテヤ申候は, セイサル帝王の朝敵なるゼズウスとくみし給ふは, 御身もセイサルの御為には大敵なれば, 此のよしセイサルへ訴ふべしと声々にうめき奉れば" (「契利斯督記」続々群書 12, p.35)

86. 6 時, 即ち現在の 12 時, 明治本, 「折節へりやせすた之六時」としている.

87. 明治本, 「ピラトス御辺達の」とする.

88. 参考; "セイサルより外には帝王をもち奉らず" (「契利斯督記」続々群書12, p.35)

89. cunju. クンジュ. 「易林本節用集」にはクシシウと清音で「群集」の語がある.

明治本は原書のまま「群集」であるが，一般に明治初期はグンジウと共に濁り，現在はグンシユウと三転した訳である．

90.参考；“如何にぜるざれんの女人わが上を啼事なかれ，只汝等と子孫の上をなけ．その故は胎内に子を胎まざる女と，子を巣立ぬ乳房は，果報なりといふべき時は来るべし．其時は，大山に向て，わが上に崩れ懸れといふべし．又岡に向つて我等を埋めといふべし．其故わ青みたる樹さえ如此なれば，枯れたる木は如何にと宣ふ也”(GP, II. 1, 3)；“青緑立つ木さえかくあれば枯木はいかが(SX, f. 95)；” 緑たつ木さえかくあるに枯木は如何” (FD. III, 10)

91.イザイヤス 53 章 12 節

92.明治本，「取べからず」とする．「とる」であろう．

93.サルモス（詩篇）21 篇 19 節．

94.参考；“くるすよりおり給へ” (GP, II. 1. 14)

95. fobai 傍輩で，閉口者の朋輩ではない．

96.明治本，「征伐」の字をあてる．

97.参考；“今日我と共にパライゾに至るべし” (SX, f. 59)

98. faua. ハハは江戸時代になつて行われ始めた．拙著「切支丹典籍叢考」pp. 150—151 参照．

99.愛の意．

100.明治本，「夫ゞ」としている，虫害のため稍〻不明であるが「これ」と読まれる．

101.参考；“如何にわがデウス何しに我を放し給ふぞ” (SX, f. 92)；“何とて我を放し給ふぞ” (FD, III. 6)

102.参考；“わがアニマを御身の御手に渡し奉る” (SG, p. 57)

103.マテウス，マルコスの両者を混ぜたものであるが，いうまでもなく，「シヤコベジヨゼイフの御母」はマリヤにかかるものでなければならない．

104. nagaxe. ペン字書き入れはこれを消して tatchiorr とし，明治本また「裁折」をあてている．

105.「早や御マニマ御色体を離れ」とあるべきもの．

106.「言いつる」と思われるが虫害部分は 2 字分あるようで，決定し難い．明治本は「言つる」．

107.エキソデス（出埃及記）12 章 46 節；ヌウメロス（民数紀略）9 章 12 節．

108.明治本は「つゝしみ」としているが，包み隠す意で，もとのままで良い．

109.校註 73 参照．

110.明治本「ハリス」とする．